

今年度におけるスルメイカ資源量の増加の要因

ポイント

- ・今年度の資源を生んだ親魚量（5.7万トン、推定値）は前年（4.0万トン）よりわずかに増加
- ・産卵海域である東シナ海のうち、太平洋へ流れ出やすい南側において幼生が前年より多く分布しており、産卵量が多かったと推測
- ・黒潮大蛇行解消に伴い、東シナ海から生育海域である黒潮続流域（東経140度以東）へ円滑に輸送（※1）される幼生が多かったと推測

※1. 幼生の輸送：東シナ海で生まれたスルメイカは黒潮により太平洋沖合の生育海域に輸送される。粒子モデルによる輸送実験によると、近年は黒潮による輸送状況が好ましくなかった。2025年の実験結果では黒潮大蛇行の終息に伴い、円滑に多くの粒子が太平洋へ輸送された。

要因1. 親魚量と産卵場の環境

2025年の資源を生んだ親魚量（5.7万トン、推定値）は、2024年（4.0万トン）より大きい

2025年の再生産可能海域（※2）は2007年（※3）と比べると狭かった

調査船調査の結果では、再生産可能海域のうち太平洋へ流れ出やすい東シナ海南側の幼生が前年より多く分布

- ※2. 再生産可能海域：スルメイカの産卵場として好適な環境条件を満たす海域でその面積が重要。東シナ海の水深100～500mかつ表面水温18～23℃の海域と定義。
- ※3. 2007年：2007年は好適な水温環境が形成され再生産成功率（※4）が6.31で1997年以降で最大。なお、2025年は5.73（推定値）。1979～2025年の平均値は3.33、標準偏差は1.45。
- ※4. 再生産成功率：（その年加入した資源尾数）÷（前年に産卵した親魚尾数）

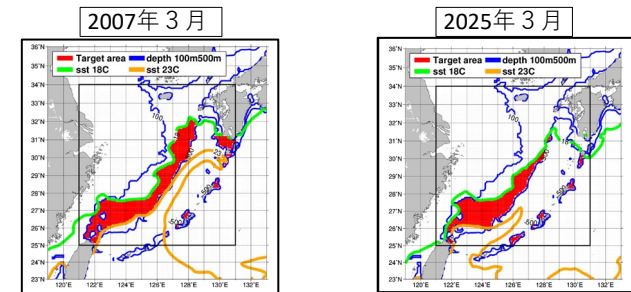


図1 2007（左）と2025年（右）の再生産可能域
2025年は2007年に比べ全体的に狭く、特に北側が狭い。

要因2. 幼生の輸送（粒子生残輸送実験）

東シナ海から太平洋に輸送される幼生の割合が多かった

黒潮の大蛇行の終息に伴い、紀伊半島から房総半島沖の生育海域である黒潮続流域（東経140度以東）まで円滑に輸送される幼生が多かった可能性

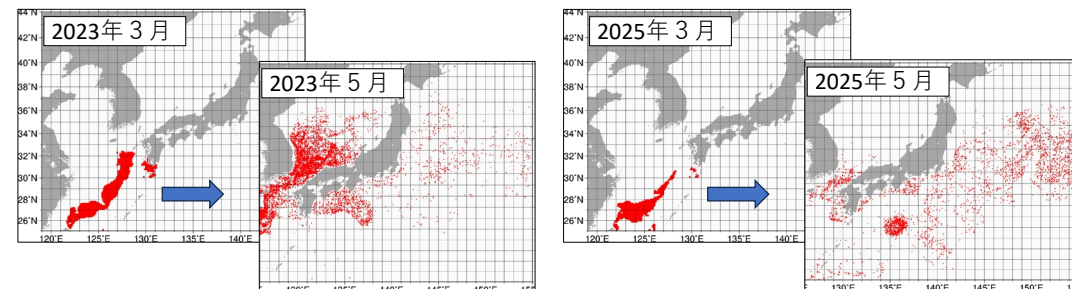


図2 2023年（左）と2025年（右）の粒子生残実験結果
3月に東シナ海の再生産可能海域で生まれた幼生（に模した粒子）が海流により輸送された後の5月の分布状況を示している。太平洋へ輸送量は2025年の方が多い。